
パイレーツ・キラー

暮城 弘士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パイレーツ・キラー

【Nコード】

N7759U

【作者名】

暮城 弘士

【あらすじ】

1人の男が、海賊を相手取りながら、孤独な航海をしていた。

彼は、過去に深い影を落としながらも、この過酷な時代を生き抜いていた。

やがて、彼は海賊達から恐れられ、こう呼ばれることになる。

パイレーツ・キラーと。

その名を誇りとして名乗り、彼は、自分の腕を磨きながら、海賊を

次々と倒していく。
そんな男の、物語。

風を受けて、静かに波の音を立てている、青く澄んだ海。空には、様々な形をした雲がゆったりと流れており、太陽が、その間を縫って眩しい光を放っていた。

穏やかな時が流れる、正午近くの海。

そしてそこに、波に身を任せるかのように、一艘の漁船が浮かんでいた。その船には、1人の男が乗っている。

その男 デイフォン・ジーフは、見た目は青年のようで、寝癖だらけの頭をしており、黒い染みが不規則についた紫色のTシャツと、ベルトが巻いてある同じ感じの色のズボンを身に付けている。左右の腰には、特徴的な彫刻が施されている紫色の短剣と、どこにでもあるような普通の短剣を、それぞれ鞘に収め、ベルトに帯刀していた。

彼は、真剣な目つきである1点を見つめている。その視線の先には、釣り糸と、その先に繋がっている浮きがあった。彼は、釣りをしてるのだ。

何故真剣な目をして釣りをしているのか。その理由は、漁船に積んでいた食べ物、昨日の昼食を最後に無くなってしまったからだ。だから彼は、それ以来何も食べておらず、しかも、今どこを漂っているのか全く分からないので、いつ餓死してもおかしくない状態になっているのだ。そのため、食料調達のために朝から釣りをしているのだが、一向に釣れる気配が無く、そしてそのまま正午近くになっってしまった。

「釣れねえな…」と、今日何回も呟いていることを、彼はまた呟いた。

それからしばらく時間が経った頃。上の方から、何やら騒いでいる声が聞こえた。

彼は最初それに気付かなかったが、やがて上から聞こえてくる騒ぎに気付き、「うるせえなあ…」とかつたるそうに呟き、声がした方向を見上げた。

そこには…一隻の海賊船が浮かんでいた。

その船は、彼が乗っている漁船の三倍近くはあるつかという大きさで、まさしく見上げないと、声の主が見えないほどだった。その甲板に、10人近くの船員と、おそらく船長であろう人物が見下ろしていた。

「やっと気付いたか！」

船長はディフォンに向かって、イライラした口調で怒鳴った。

さっきから何度も呼びかけているのに、全くこっちを向かないので、無視されていると思っていたのだ。

「お前の乗せている荷を全部こちらに渡せ！そうすれば、さっきまでのことは見逃してやる！」

ちなみにさっきまでのこととは、ディフォンが船長に気付かず、釣りに没頭していたことだ。

普通の人間なら、今まで気付かなかったことを全力で謝り、自分が持っている物を全て渡すところだろう。

船長も船員達も、そうなると思っていた。

しかし、ディフォンの反応は彼らにとって、普通では考えられないような驚くべきものだった。

ディフォンは船長と船員達をじっと見つめ…そして、余裕そうな笑みを浮かべたのだ。

彼らはそれを見て、ある意味の恐怖を感じた。

なんなんだ、こいつは -

海賊船に乗っている誰もが、そう思った。

今までの航海の中で、あの脅し文句を言ってこんな反応をした者は誰1人としていなかったのだ。ましてや、今見下ろしている男は、見た感じはどこにでもいる普通の青年のようにしか見えなかった。

だから、まさかあんな反応が返ってくるなど、夢にも思わなかったのだ。

海賊船と漁船の間に、いつの間にか、沈黙が広がっていた。その間、ディフォンは余裕そうな笑みを崩すことなく彼らを見ていて、彼らは、ディフォンのその笑みを、何か奇妙な物を見ているかのような表情で見下ろしていた。

そのまま何分ともとれない時間が過ぎ…ようやくディフォンが、沈黙を破った。

「なんだ？さつきから人の顔を奇妙な物でも見るような目で見やがって。なんか言いてえことがあんなら、とつとつと見え。俺は忙しいんだ」

船長は、ディフォンの馬鹿にするような言葉に、「このままでは舐められたままだ」と思い至り、首を振り、ディフォンに感じた恐怖を振り払うように叫んだ。声は上ずっていた。

「お、お前、分かっているのか！俺達は…海賊だぞ！お前みたいな奴が…逆らったらいけない相手なんだぞ！」

ディフォンはしばらく船長を見上げていたが…。急に吹き出し、いまままで堪えていたものが決壊したかのように、腹を抱えて笑い出した。まるで、物凄く面白いギャグを聞いたかのような、ひどく愉快そうな笑い声だった。

船長は、突然大笑いをしだした彼を見て、しばらく驚いていたが…。その笑い声を聞いている内に、段々と腹の底から、怒りが盛り上がって来た。

「お前…！何がおかしい！」

さっきの上ずった声とは全く違い、今度は脅すような口調だった。

しかしディフォンは、態度を変えずに、笑いを堪えるのに必死そうな表情で言った。

「だ…だってよ…。あんな上ずった声で、あんな、脅すようなことを言うんだぜ…？そりゃ誰だって…笑うだろ…くくく、あっはっはっはっは！」

遂に堪えきれなくなったのか、彼は話している途中で、また笑い出した。

船長は、彼の言葉を最後まで聞いていなかった。

今まで、こんなただの青年のように見える男に、ここまで馬鹿にされたことは無かったのだ。なので、彼はプライドをズタズタにされたような気分になった。その結果、彼は完全に頭に血が昇っていた。

「責様あああああ！！ぶっ殺してやる！！！」

彼は、全ての恨みを込めた怒声をディフォンに向けて放ち、まるで鬼のような形相で、周りにいる船員達を見渡した。

「お前らああああ！！大砲の用意をしろおおおお！！！」

船員達は、今まで聞いたこともないような怒声に肝を抜かしていたが、さらに船長の鬼のような形相を見て、ディフォンに感じた恐怖以上のものを感じ、我先にと、蜘蛛の子を散らすように、砲台に向かって走っていった。

しばらくして、数個ある砲筒が音をたてて動き出し、デイフォンの乗っている漁船に狙いを定めた。

しかし、それでも彼は動じる気配が全く無かった。

それどころか、甲板から見下ろしている船長を、余裕そうな笑みで見上げていた。

「おいおい、俺1人殺すためだけに、砲弾を使うってえのか？おめえは、馬鹿なのか、いや、馬鹿だな、あっはっはっはっはっはっは！」

そう笑い混じりに、馬鹿にした口調で言った。

船員達もそう思っていた。

船長の、あまりにも怒気溢れる声と表情に気圧され、そのせいで、急いで大砲の用意をしたのだが、今この場で思うと、たった1人の男のためだけに砲弾を使うなど、あまりにもバカバカしく、そしていくらなんでもやり過ぎではないかと彼らはそう思い始めた。

だから彼らは、撃とうかどうかためらっているのだ。

いつまでも撃たない船員達にしびれを切らし、さらに、デイフォンの馬鹿にしたセリフを聞いた船長は、さっきよりもさらに怒気がこもった声で叫んだ。

「何をしている！！さつさと撃てえええええ！！」

船長のあまりにも怒りがこもった声に、「このまま撃たなければ自分達の誰かが殺されかねない」と思った船員達は、大砲に込めた砲弾を、一斉に漁船に放った。

デイフォンが乗っていた漁船は何個もの砲弾を浴び、大爆発をおこした。そしてその衝撃で、水飛沫が、甲板に立っていた船長に掛かるほど高く上がった。そのあまりの衝撃に、彼はおもわず体を翻し、目を硬く閉じた。その上から、大量の水が振ってきた。

衝撃が収まり、しばらくしてから彼は目を開け、漁船が浮かんでいた方へ視線を向けた。

そこには…船の残骸かと疑うほど、木端微塵になった破片が浮かんでいた。誰がどう見ても、あの船に乗っていたデイフォンは、死んだと思えない光景だった。

船員達が砲台から戻ってきて、船長の1歩後ろに集まった。

そこからは船長の後ろ姿しか見えなかったが、その彼は、肩を震わせ、微かに声を漏らしていた。

彼らは、そのただならぬ様子に困惑していたが、しばらくして、急に船長が後ろを振り向いた。

その顔には…不気味なほどの満面な笑みを張り付かせていた。

「あっひゃひゃひゃひゃ！！見たか！！俺を馬鹿にしたらこうなる

んだよ！！お前らも、よく覚えておきなあ！！ひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！」

「あの男を殺したのは俺達だ」と彼らは思ったが、船長のあまりにも狂った笑いと様子に恐怖を覚え、何も言えずに、ただ彼を見ていた。

しばらくその様子を見ていた船員の1人が、耐えられなくなったのか、船長から視線をそらした。そして、ふと、少し離れた甲板の縁を見て…その瞬間、顔を青ざめさせた。その様子に気付いた残りの船員達は、不思議そうに顔を見合わせ、その方向を見て…一斉に同じ反応をした。

しばらくして、狂った笑い声を出し続けていた船長が、船員達の様子に気付き、笑いを止めた。

「どうした、何を見ているんだ？」

船長の問いに船員達は言葉が出ず、震える指でその方向を指差した。

彼は、指差された方向を向いた。

そこには：あの爆発で死んだはずの、ディフォンが立っていた。

その顔には余裕そうな笑みを浮かべ、そして右手には、紫色をした、鍔に特徴的な装飾：人の骸骨の装飾が施されている短剣を握っていた。

船長は、自分の命令で殺させたはずの男を目の前にし、あまりの驚きに目を見開いていた。

そんなはずはない

何故こいつがここにいるんだ

あの時確かに死んだはず

いろいろな疑問が彼の脳裏を駆け巡ったが、あまりにも衝撃的な出来事を目の前にし、言葉に出すことが出来なかった。そしてただただ、甲板の縁に立っている、殺したはずの男を眺めていた。

ディフォンはその場で、顔を青ざめさせている船員達と、目を見たことが無いほど見開いている船長を見て、軽く笑った。

「てめえらはこう思ってたんだろう？」「何故殺したはずの男が、こんな所に立ってるんだ？」「ってなあ」

ディフォンは、右手を彼らに見えるように上げた。

「種明かししてやる。こいつは、スカルチスつつつてなあ」

自分が何故ここに立っているのか、右手に握っているスカルチスの仕組みの説明を交えながら説明しようとした……その時。

「う……うわああああ!!」

急に船長が、腰に差していた短剣を抜き、ディフォンに襲い掛かってきた。

しかし、襲われかけている当の本人は怯んだ様子を微塵も見せず、余裕そうな笑みを浮かべたまま、右手に握っているスカルチスで、難なく短剣を受けとめた。

罅迫り合いをしながら、彼らはお互いの表情をそれぞれ見返していた。

船長は殺気立った目をしていて、「今度こそこいつを殺してやる」という強い意志が、ありありと感じられた。それに対してディフォンは、余裕そうな笑みを浮かべており、「こいつ程度なら簡単に倒せる」と言わんばかりの余裕ぶりだった。

「おいおい、いきなりどうした？遂におかしくなったか？」

「だまれ、化け物!!」

「化け物？」

ディフォンは軽く声を上げて笑った。

「まあ確かに、殺したはずの男がこの場に立ってんなら、普通はそう思うよなあ」

ディフォンは、船長の短剣をじよじよに押し返した。

「だがなあ。俺の説明を聞けば、納得するはずだぜ？」

何故俺が、こんなところにいるのか

そう続けようとしたが、しかし最後まで言えずに、彼は船長の短剣を弾き、横に跳んだ。

今まで見ていた船員の1人が、短剣を手に、ディフォンに向かって来ていたのだ。

あと少し反応が遅れたら横腹が刺されていたところだったディフォンは、誰もいなかった地点に、滑り込むように降り立った。

ディフォンは、その場で顔を上げ船長と船員達を見ようとして…後ろに思い切り跳ぶはめになった。

その目に飛び込んできたのは、一斉に襲い掛かってくる船員達の姿だった。

ディフォンは余裕そうな笑みを更に広げ、先頭にいた3人の内、左側にいた船員に素早い動きで近づき、喉を切り裂いた。そして攻撃の手を緩めること無く、今度はディフォンの右側にいた船員の首を貫き、船員達から離れるように、横に跳んだ。

そのあまりの速さについてこれなかった2人の船員は、喉や首から、血を吹き出しながら倒れた。残りの船員達はその様子に驚愕し、動きを一瞬止めた。

その一瞬の隙を見逃さず、ディフォンは素早く踏み込み、近くにいた船員数名の手を横薙ぎにした。手を失った彼らは、自分の手があつた部分を見て断末魔の叫びをあげたが、それには目もくれずに、ディフォンは残った船員達の首に容赦なくスカルチスを刺し続けた。船員達は、その怒涛の攻めに体がついていかず、ただただ、刺し殺されるだけだった。

そして、数秒後―。

ディフォンの足元には、主に首や喉から血を流し続けている、船員達の死体が広がっていた。そしてその中心で、返り血を浴び、まるで赤い悪魔のような姿になった彼は、余裕そうな笑みを浮かべたまま、船長をスカルチスで指差した。

「次はてめえの番だ。覚悟は出来てるか？」

静かに歩み寄ってくるディフォン。彼を遠ざけようと、船長は、さっきの殺戮劇を見てすっかり腰が抜けた体を引きずりながら、後ずさった。

「ま…待ってくれ！話を聞こう！なんだっけ…。そう！あの場所に立っていた理由だ！」

ディフォンは足を止めた。

「そんなに理由が知りたいか…？」

「あ…ああ！知りたいな！なんでだ？教えてくれよ！」

船長は、なるべく好感度が上がるように、わざと声の調子を上げた。

「じゃあ、教えてやる」

ディフォンは、右手に握っているスカルチスを、胸の高さに上げた。

「こいつはスカルチスつつつてなあ、こいつから紫色の霧が出んだ。その霧は、俺の見える範囲なら、どこでも移動することが出来る…こんな風にな」

その途端、スカルチスから紫色の霧が出てディフォンを包んだかと思うと、その瞬間、彼はその場から消えていた。

船長は突然消えたディフォンに驚き、辺りを見渡し、後ろに紫色の霧が出ているのに気付いた。

彼はその霧をじっと見ていたが…急にその中からディフォンが飛び出してきた。そしてその勢いのまま、ディフォンは彼の胸をスカルチスで刺した。

彼は、突然のことに何の反応も出来なかった。

ディフォンは、スカルチスに刺さっている船長を、呆れた顔で見ている。

「まさか、何の構えもしねえとは思わなかったぜ……。結局、生きててもいつか死んだな」

デIFOンはスカルチスを引き寄せ、船長を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた船長は、スカルチスから体を引き抜かれ倒れこみ、胸から血を流したまま動かなくなった。しばらく船長を見ていたデIFOンは、顔を上げ、甲板を見渡した。

「我ながら、ひでえ有様だなあ……。いろいろあれだし、掃除でもしておくかあ……」

彼は、自分が引き起こした惨状をひとしきり見渡した後、掃除道具を探しに、数十分前は、あの船長のものだった海賊船の中に入っていた。

船内に入ったディフォンは、まず最初に左側にあったドアを開け、中を覗いた。

その部屋は船員達のもののように、机と椅子、タンス、ベッドがそれぞれ二つずつあるだけの、窓が無い、色彩に乏しい部屋だった。

彼はドアの近くでその部屋を見渡し、目的の物が無いことを確かめると、ドアを閉め、今度は右側にあるドアを開けた。その部屋も、最初見た部屋とほとんど変わらなかった。同じように見渡し、そこにも目的の物が無いことを確かめ、ドアを閉めた。

そして、彼は改めて通路に立って見渡してみた。

通路に沿ってドアが左右に何個もあり、奥には、ドアが無い、広い部屋のような空間が広がっていた。

彼は何個かあるドアを順番に開けていき、同じように見渡した後、閉めるを繰り返した。

その内に、他の部屋とは違う雰囲気のある部屋に辿りついた。その部屋には、机や椅子、タンス、ベッドが、他に置いてあった物とは違い、睡蓮の花の模様が描かれていた。壁には窓があり、その近くに、クロユリを描いた絵が飾ってある。

「ここが船長室か…」

彼は、やっと変化がある部屋に辿りついたことへの安堵感と、ここ

に対する興味とが入り混じり、他の部屋よりじっくりと時間をかけて探索をした。

五分後！。

彼は疲れたように、窓に寄りかかっていた。

「なんも無え…。期待して損したぜ…」

彼は、深い溜息をついた。

「いくら、『俺が相手にした中で十本の指に入るほど弱い海賊船長』だっつっても、金目の一つや二つも無えとは…。こんな奴、初めてだぜ…」

また溜息をついた後、彼は部屋から出た。

そして最後に残った、あのドアが無い広い部屋のような空間に見えた場所に、入って行った。その部屋は他の部屋より広く、長テーブル二つに椅子が何個か入れられていて、奥にはキッチンのような所があった。

壁の片隅には、使われていない椅子が何個か積み重なっていた。

「ここが食堂か…。そっいや、まだ何も食って無えな………」

彼はそれに気付き、キッチンのような所に行き、食糧を探すために色々と漁り始めた。

そして、十分後…。

食糧を見つけ腹を満たした彼は、偶然見つけた、いかにも安い酒を瓶一本一気飲みしていた。そして飲み終わると、瓶をテーブルに置き、満足そうに息を吐く。

「久しぶりに飲む酒はうめえぜ。だが、まだ足りねえ」

彼は気分が良くなり、二つ目の酒瓶に手を伸ばした。

ちなみに、この船には何故か酒瓶が大量に積まれており、それを偶然見つけ、彼は正に財宝を見つけたような気持ちになっていた。

五本目の酒瓶を空にした彼は、ふと何か忘れているような気がして、手を止めた。

「そついや、何か探すために来たんだよな……。なんだっけ……」

額に手を当てて、忘れていた何かを思い出そうとしたが……。しばらく経つても思い出せなかった。

「まあ、いいや。それより酒だ！今日は飲むぞ！」

彼は、アルコールのせいでテンションが段々上がってきているのに気付かず、六本目の酒瓶を空にし、次の酒瓶に手を伸ばした。

甲板の様子

ディフォンが食堂で、大量の酒を消費している頃。

甲板は、不気味なほどの静寂で満ちていた。

さざ波の音が聞こえ、空に浮かぶ雲が、風にゆっくりと流されている。それだけ見ると、本当に何とも無い、ただの静かな場所に思えた。

しかし、辺りに流れている血や、その辺に転がっている死体が、その場を狂気染みたものに変えている。

甲板には、ディフォンによって首を貫かれた死体の固まりと、少し離れた所に、同じ相手にやられた、胸を血だらけにした死体が転がっていた。それらはそれだけで、この場で起きた、殺戮劇の壮絶さを嫌でも物語っている。

しばらく、その狂気染みだ静寂は続いたが……。突然遠くから鳴り響いてきた鳴き声に破られた。

その声は最初、聞き間違いかと思うほど遠くから響いていたが、近づいてきているのか、次第に大きくなっていく。

そして、その鳴き声がピークに達したころ。

空から、声の主となっていた海鳥が、死体の頭部に降り立った。その鳥は、鋭く尖った黄色いくちバシ以外は、白くくすんだ体や羽を

している。目は、獲物を狙う獣のように鋭く光っていた。

しばらく何かを探すように頭部を歩いていたが……。やがて首の方に近づいていき、立ち止まった。

そして突然、鋭いクチバシを喉の傷に突き刺し、中の肉を貪り始めた。まだ残っていた血が吹き出し、その白くくすんだ体を赤く染める。

しかしそれに構わず、喉の傷を更に広げ、肉を引き摺り出しながら貪り続けていた。

しばらくそうしていたが、やがて満足したように1鳴きし、顔を上げ、辺りを見渡した。

同じような姿をした20匹近くいる仲間が、それぞれ、死体の肉を引き摺り出しながら、貪り食っている。

数分後！。

満足した海鳥の群れは、散らばった肉片や骨をそのままにし、やかましい鳴き声を上げながら飛び去って行った。

甲板は、更に酷い状況になっていた。

ディフォンの過去― 1

俺は、名も知らぬ通りを歩いていた。

元は白く塗装されていたであろう道は、霞んだ色をして、雑草が乱雑に生えていた。周りにある家の壁は、漆喰が剥がれていて、見た目はまるで廃屋のようだ。それらの様子から、この通りは人が誰も住んでいない廃墟にしか見えないが、耳を澄ませると、家からは人の話し声が聞こえたり、通路の影には、人が座ってこっちを見ているなど、こんな場所にも人が住んでいることが分かる。

俺は立ち止まり、上を見上げた。

空には星が無数に輝いていて、その輝きより眩しく光っている月が、この廃墟のような通りや家を照らしている。

俺はしばらくその輝きを眺めていたが、首が痛くなり、前に向き直った。

いつの間にかいたのか、目の前に2人組の男が道を塞ぐように立ち、俺を、まるで物を見るような目で、嫌な笑みを浮かべながら見ている。その2人組は、頭はスキンヘッドで肌は薄黒く、タンクトップに半ズボンを身に付け、それらが、筋肉によってはち切れんばかりに膨らんでいる。

俺は、そいつらを見て顔をしかめ、他の道に行こうとし、後ろを振り向いた。

その直後―。

いきなり後頭部を、脳が揺さぶられたかと思うほど強く殴られた。俺はその痛みに耐えきれず、思わず倒れこんでしまう。

後ろにいた2人組が、手を叩き合って喜んでいるのが聞こえた。

「やったぜ、おい！こんな所まで来て、正解だったな！」

「ああ、そうだな。これでこいつを工場に売り飛ばせば、しばらくは遊んで暮らせるぞ！」

2人組は嬉しそうに言い合い、俺を抱えて、さっき俺が通った道を引き返していった。

2人組は、俺を抱えて歩きながら、楽しそうに話していた。

「こいつを売り飛ばしたら、まずは何をしようか!」

「まあ、その時に考えればいいだろ。どうせ、こいつは何も出来ないんだからなあ!」

「確かにそうだな!がっはははは!」

といったような会話を交わしていた。

俺はそれを聞きながら、ある工場を思い出していた。

その工場は支配が徹底されていて、何から何まで、きっちりと時間が決められていた。

まず朝の三時に起こされ、そのまま夜の九時まで働かされる。その後、労働に合わない量の食糧を与えられ、食事の時間も合わせてたつたの三十分しかない休憩時間を過ぎると、少ない睡眠を与えられ、また働かされるのだ。

トイレは、そのわずかしき無い休憩時間の時にしなくてはならないが、ある日、俺と同時に連れてこられた少女が、我慢できなくなつたのか、その時間では無いのに行ってしまった。そのことに数十人いる監視員の1人が気付き、その少女が戻ってきた途端、まるで見せつけるように、怒声を上げながら、彼女を何度も殴ったり蹴った

りした。彼女は泣き叫びながら、「ごめんなさい！ごめんなさい！」と何度も繰り返し返したが、それでも止めることなく、何度も暴行を加え続けられた。

他に働かされている奴らは、『なにやってんだよ』と言いたそうな顔で、少女を見ていた。

骨が砕かれ、口からは血を流しながら泣き叫んでいた少女は……。やがて、ただの亡骸になった。それに気付いた監視員は動きを止め、呼吸を整えながら、こちらに向き直った。

そして平然とした顔で、少女の亡骸を指さしながら言った。

「誰か、このゴミを片付けてくれ」

俺は、信じられないという気持ちでいっぱいになった。

そいつは、今まで生きていた、酷い殺し方をした少女をゴミ呼ばわりしたのだ。そして、もう慣れてしまっていたのか、数人が、本当にゴミを片付けるように少女の亡骸を簡単に捨てたことにも、信じられない気持ちでいっぱいになった。

あの少女とは、いつも励まし合っていた。彼女がいたからこそ、俺は頑張れた。周りの奴らは、そんな俺達を変なものでも見るような目で見ていたが、それでも、少女と話せるほんのわずかな時間が、とても楽しかった。

俺は、恐怖のあまり何も出来なかった悔しさと、周りの、あまりに

も酷い態度への怒りが、自分でも抑えられないほど込み上げていた。そしていつの間にか、近くにあった窓を殴っていた。

よほど力が入っていたのか、頑丈なはずのガラスが、音を立てて割れた。

その様子に、さすがの周りの奴らも、驚いて俺を一齐に見た。しばらくして監視員が、怒声を上げながらこっちに走ってきた。

俺は茫然として、血に濡れてかすかに痛みがある左手と、足元に散らばっているガラスの破片を、交互に眺めた。そして左手で、ガラスの破片を持った。

その途端、心の底から何かが湧きあがってくる感覚がした。俺はその感覚に身を任せ、迫ってくる敵に向かっていった。

俺は、2人組がいつの間にか立ち止まっているのに気付き、回想を終わらせた。2人組は、顔を合わしたり前を見たりしながら、何かを呟いていた。

よく聞いてみると、「なんだよこれ……」とか、「こんなの有り得ないだろ……」など、目の前の光景に驚愕して、頭が混乱している様子が、それらの呟きだけで分かった。

俺は、こいつらが今見ている光景を知っている。

そこには喉を切り裂かれた、監視員の制服を着た十数人の大人と、従業員だった、子供数人が殺されており、そこから流れた血が、赤い水溜りのようになっていて、壁には、血の滴が、赤い模様を付けている……という光景だ。俺は、それらを見なくても言い当てること出来る。なぜなら……。

そいつらを殺したのは、俺なのだから。

俺を抱えている男は、目の前の惨状に茫然としていて、腕に意識がいつていかなかった。俺は、その隙に腕を振りほどき、ちょうど、男の背後になるように降り立つ。

男はそれに気付き、振り返った。

そして振り向き様に…。

俺は、足に隠していた、刀身が剥き出しの短剣を取り出し、そしてそれで、男の喉を貫いた。

刺された本人は、何が起きたのか分からないと言いたそうな表情を浮かべながら、血を流し、倒れた。完全に死んでいた。

もう1人の男は、喉から血を流して死んでいる男に驚いていたが、相棒を殺された怒りからか、憤怒の形相を浮かべ、俺に向き直り、何かを言おうとして口を開いたが……。そのままの形で、まるで固まったように動かなくなつた。そして、段々と目を見開き、さつきまでと打って変わって、怯えた表情を浮かべながら、足を引きずる音を立て、後ずさつた。

俺は、何故この男が、こんな行動を起こしたか分かっていた。

俺は口を釣り上げ、瞳孔が完全に開いた、見る者の背筋を凍らせるような笑顔を広げているのだ。

きっかけは、ガラスの破片で、向かってくる監視員達を切り裂いた、あの日だった。

最初は腕や顔や腹など、適当な部位を切っていたが、その過程で、たまたま喉を切った。すると、喉を切り裂かれたそいつが、そこを抑えながらうずくまり、血を口から吐き出しながら、痙攣し始めた

それを觀賞していた俺は、ふと、窓に視線を向けた。

口を釣り上げ、瞳孔を完全に見開いた自分の顔が、そこに映っていた。

俺はそれを見て、背筋が冷たくなった。まさか、あんな顔をしているとは思わなかったのだ。

その、あまりにも狂気染みた笑顔に恐怖を感じ、必死に元の顔に戻ろうとした。

だが、充滿している血の匂いを嗅ぎ、喉を切り裂いた後の、あの呻き声が耳に蘇り、ちらちらと見える死体を直視してしまうと、また、あの顔に戻ってしまった。

「まあ、いいや。今の俺は、とても満たされているんだからなあ！
！」

俺はしばらく、もう痙攣をしなくなった死体を眺めていたが、やがて、あの顔がすっかり消えているのに気付き、工場を出て行った。

そして俺は、工場に連れて来られる度に、監視員どもを皆殺しにし、ついでに、近くにいた従業員を数人殺し、工場を後にするというのを、何度も繰り返した。

俺を見ている男は、小刻みに震えている。それを見て、ますます笑みを広げ、ゆっくりと近づいた。

男は、俺が近づく度に後ろに後ずさった。やがて、壁に背中が当たった。もう下がることが出来なくなったことに気付いた男は、ますます怯えた顔をして、俺を見た。

それを見ていると、段々と笑いが込み上げてきて、俺は軽く笑った。男は、その声に「ひっ！」と声を上げ、ただでさえ大きい図体を壁に押し込めるように、更に後ずさろうとした。

俺はしばらく、その様子を楽しみながら見ていたが……。やがて飽きてきた。

「そろそろ見飽きた……。もういいや」

短剣を持ち上げ、男の喉を貫いた。男は目を見開いたまま、動かなくなった。

俺は、男の瞳を通して、自分の姿を見た。

口を釣り上げ、瞳孔が開き、背筋が凍るほど狂気染みた笑顔を浮かべた顔が映っていた。

しばらく見ていたが、次第に、元の顔に戻っていったので、男の喉から短剣を引き抜き、元のように隠し持った後、いつものように工場を出ようとして、後ろを振り向いた。

そこに、男が立っていた。

寝ぐせだらけの頭をしていて、無精ひげを生やし、紫色の服とズボンをだらしなく身に付けている。腰には、髑髏の装飾が印象的な短剣を差していた。

俺はさすがに面喰ったが、すぐに、その男を睨みつけた。そいつは、俺をしばらく見ていたが……。急に満面の笑みを浮かべた。

俺は、その急な変化に驚いた。そいつは辺りを見渡しながら、話しかけてきた。

「いやあ、すげえ光景だなあ！まさか、お前さん1人でやったのか？」

「そつだ……。だから、どうした？」

俺は警戒しながら答え、男が答えるのを待った。

それ次第ではこいつも殺そうかと思ったが、男が発した言葉に、また面喰うことになった。

「いやあ、ちようど良かったぜ！実はなあ、俺は強え奴をずっと探してんだ！お前さん、仲間になる気は無えか？」

「…は？」

俺は、男が言ったことがすぐに理解できず、しばらくの間、茫然としていた。やがて言葉の意味をやっと理解した俺は、呆れて男を見た。

「あんだ…わかってるのか？俺は、こいつらを殺した。言わば、殺人鬼だ。なのに、そんな奴を仲間にしよつとするのか？寝首をかかれるかも知れないだろ」

男は楽しそうに、だが確かな決意が感じられる声で答えた。

「もちろん、覚悟は出来てるぜ！それになあ。俺の仲間は、元殺人鬼が数人いるんだぜ？だから、1人や2人増えたって、変わりやしねえさ！」

俺は、それを聞いてまた驚いた。

この男は、そんな危険な奴らと共にしているのだ。今まで殺されなかったのが、不思議に思えてきた。

しばらくどうしようか考えたが、あることが思い浮かび、男に表情が見えないように、後ろを向いた。

もし、この男が妙な動きを見せたら…。その時は、こいつの仲間を皆殺しにすればいいんだ。

俺はそれを思い、あの笑顔を一瞬だけ浮かべた後、また男に向き直った。

「分かった…。俺は、あんだの仲間になろう」

そう言った途端、男は飛び跳ねながら喜んだ。

「よっしゃあ！仲間が増えたぜ！いやっはあ！」

さすがに慣れ、俺は、おおげさに喜んでる男を眺めた。

しばらくして、男は息を切らせながら立ち止まり、俺に向き直った。

「よし！じゃあ行くこうぜ！この近くに、俺らが泊まってる宿があるだ！ついてきな！」

男は歩き出した。俺はそれについて行った。

工場を出てしばらく歩いていたら、男が、何かを思い出したように「あっ！」と呟き、後ろを向いた。

「そっいや、お前さん、名前はなんていんだ？」

「俺は……。……デيفونだ」

「そうか！俺はジーフってんだ！改めて、よろしくな！」

男 ジーフは、満面の笑みを浮かべながら親指を立て、また前に向き直った。

俺は、その背中をずっと見ていたが……。

急に意識が遠くなり、目の前が段々と暗くなっていく。それに気付いた時にはもう遅く、意識が、まるで深い闇に落ちていくように、

完全に真っ暗になっていくのを感じた。

・デイフォンは目を覚まし、まだ意識がはっきりしていない頭で、ぼんやりと辺りを見渡した。

まず最初に目についたのは、机の上に転がっている、大量の酒瓶だった。数えてみると、18本が空になっている。

デイフォンは、寝る前の出来事をぼんやりと思い出す。

「確か俺は……。酒を飲んで……。ちょうど18本目を飲み終わって……。それで、急に眠気が襲ってきて……。ここで、寝ちまつたんだな……」

デイフォンは立ち上がり、腕を高く上げながら、体全体を伸ばした。関節が音を立て、少し気持ちよくなる。そのまま、大きく口を開けて欠伸をした。

ふと、夢で懐かしい光景を見ていたような気がして、思い出そうとしたが、そこで、船が大きく揺れているのに気付く、思考を戻した。

「なんだ……？二日酔いか……？」

最初はそう思ったが、よく見ると、机の上に転がっている酒瓶が、この揺れに合わせて転がっている。

デイフォンは嫌な予感がし、唯一窓がある船長室に、早足で向かった。

少しして目的の部屋の前にたどり着き、ドアを開けた。そして、目の前の光景に啞然とした。

開いた窓から水が大量に入り込み、部屋が、完全に水浸しになっているのだ。

「おいおい……。まじかよ……」

しばらく茫然として眺めていたが、顔に水の飛沫が掛かり、そのおかげで我に返ったデイフオンは、これ以上水が入らないように、窓に急いで近づいた。少し手間取りながらも窓を閉め、そこから外の景色を見る。

空からは、雨が、海に叩きつけるように降っており、風によって発生した大波が、船を転覆させそうな勢いで、ぶつかっているのが見えた。昨日の穏やかさとは打って変わって、今日は完全に荒れ果てていた。

「このままだと、転覆しちまうぞ……。どっか、港を探さねえと……！」

さすがに危険を感じたデイフオンは、甲板に向かって走った。大抵は、そこに船を動かす、操舵輪があるからだ。

甲板に出たデイフオンは、大波によって大きく揺れている船のせいで、海に放り出されそうになったり、激しく叩きつけるように降る雨で、視界が遮られながらも、ようやく、操舵輪を見つけた。

振り落とされないようにしがみつきながら、辺りを見渡す。

幸い、空は少し明るかったので、遠くの方にぼんやりと、港らしきものがあるのが、かろうじて見えた。

「見つかって、よかったぜ……」

運よく発見できたことに安心し、デيفونは、少し気を緩めた。

「とつとつ、あの港に行かねえと……!」

緩みかけた気を締めなおし、操舵輪を巧く操作して、港に向けて船を動かした。

ディフォンが港に近づくに連れ、あれほど荒れていた海や空が、段々と静まっっていく。そして、港に着いた頃にはすでに雨は止んでいて、太陽は出てなかったが、さっきまでとは比べ物にならないほど、穏やかな天気になっていた。

「さっきまでの荒れようは何だったんだ……」

思わず、ディフォンがそう呟いたほどだ。

それから改めて周りを見渡し、自分が乗っている船の隣に、もう一つ、大きさはほとんど変わらない船があることに気付いた。その船を見て、ディフォンは、何故か妙な予感がした。

「なんだ…?」

そう呟き、隣にある船を、よく見てみた。

すると、その船の甲板に8人ほどの男がいるのが見え、彼らともロープを持って、こちらを見ているのが分かった。

「まさか、こっちに来るつもりか…?」

ディフォンはそう思い、そしてその考えは、見事に的中することになった。

その8人は、ロープを持ったまま後ろに下がると、そのままこちら

に向かつて走り出し、甲板の縁まで来ると大きく飛び、ロープの反動を使って、巧くこちらの船に降り立ってきたのだ。

その芸に、思わずディフォンも、感心して見ていたほどだ。

今まで、このようなやり方で船に乗り込んでくる海賊を見てきたが、大抵の奴は、甲板の縁に降り立って落ちそうになるか、反動が足りなさ過ぎて海に落ちるか、逆にありすぎて、狙ったところと大幅にずれるかのどちらかだった。

しかしこの8人は、ディフォンを囲むように降りてきて、完全に逃げられなくしていた。全員例外無く、威圧的に笑っている。その内の1人が、話しかけてきた。

「お前、この港に用があるのか？一応用件は聞こう。まあ用があっても、ここから追い出すだけだがなあ」

残りの男達は、馬鹿にしたように含み笑いを漏らしていた。一方ディフォンは、その男が言ったことに少しだけイラつき、言い返した。

「なんででめえらごときに、俺が従わなきゃなんねえんだ？」

8人の男は、一斉にざわついた。おそらく、今まで港に近づいてきた船に同じことを言っていたのだろう。そして、その威圧的な雰囲気には耐えられず、逃げだした者しか相手にしていない。だから、ディフォンの予想外の返事に、即座に対応できないのだ。

しばらくざわついていたが、やがていい考えが思い浮かんだのか、1人の男が笑いを浮かべ、ディフォンに向き直った。

「てめえら。そんなんで、この俺が従うと思ってんのか？1つ言っ
といてやる」

デیفオンは人差し指を立て、高く上げた。

「俺だったら」

もう片方の手を広げたまま高く上げ、人差し指を立てた手も、広げ
た。ちょうど、万歳をしている格好になった。

「てめえら程度の相手、十秒であの世へ送ってやるぜ」

その言葉に、8人は全員過剰に反応した。

「なんだと、てめえ！！」「舐めたこといつてんじゃねえぞ！！」
「ぶち殺してやるうか！！」「てめえが、あの世へ行きやがれ！！」

最初は聞きとれたデیفオンだが、段々と声が混ざってきて、ただ
叫んでいるようにしか聞こえなくなった。耳を塞ぎながら、また、
挑発した。

「うるせえな……。さっさと来いよ。口だけの雑魚やろうども」

完全にぶちぎれた8人の男は、それぞれ短剣を抜き、怒鳴り声を上
げながら、一斉に向かってきた。

デیفオンは余裕そうな笑みを浮かべたまま、スカルチスト、もう

一つ腰に差している短剣を抜いた。その短剣は少し錆ついていたが、それ以外は、どう見ても普通の短剣だった。まあ、本当に、どこにでもある短剣なんだが。

「いくぜ……」

余裕そうな笑みを浮かべて呟き、二つの短剣を構え、まずは目の前の男に向けて走っていく。

「死にやがれえ!!」

その男は、近くに来たディフォンに、短剣を振りかざした。

その攻撃を左に避け、そして、ちょうどそこにいた男の腹と胸を二つの短剣で突き刺し、止まることなく、男を押し出すようにして集団の後ろに回り込む。そして男を突き飛ばし、短剣から引き抜くと、そこで一旦止まった。

その一瞬の出来事に啞然とした残りの7人は、立ち止まって、ディフォンを見た。

「てめえ……。一体なにものだ……?」

少し恐怖が混じった声で、男の1人が尋ねた。ディフォンは、余裕そうな笑みを浮かべている。

「知りたいなら教えてやる。俺は……」

そこで一旦言葉を切り、大声で誇らしげに叫んだ。

「パイレーツ・キラー」ディフォン・ジーフだ!!」

その途端、彼らは一斉にざわつき始めた。

「こいつが、あの伝説の!?」「今まで海賊を何十人も殺してきた最強の男……!!」「まさか、こいつがそうだったとは!!」「俺達、とんでもない奴を相手にしてんじゃないのか!？」

最初は聞きとれたディフォンだが、やがてざわついた雑音にしか聞こえなくなり、耳を塞いだ。

「で、どうすんだ?これ以上犠牲を増やす道を選ぶか?それとも、尻尾巻いて逃げる道を選ぶか?まあ、俺は後者を勧めるが?」

男達はずいぶん長く話しあっていたが、やがて大きな決断をした顔つきで、ディフォンに向き直った。

「本当に、てめえがあのだ「パイレーツ・キラー」だとしても、どうせこの場から逃げててもマグチェスに殺されるだけだ。だったら……」

男達は、短剣を一斉に構えなおした。

「てめえを殺して、その首を打ち取ってやる!!」

「」「うおおおおお!!」「」

随分と気合が入った雄たけびを上げ、男達が、一斉に向かってきた。

「おいおい……。どんだけ怖えんだよ、マグチェス・ガイン……。ま、いいや」

ディフォンも、二つの短剣を構えなおした。

「なんなら俺も、本気で行くぜ!」

叫びながら、男達に向かっていった。

勝敗が決まるのはあつという間だった。

「全く……。俺が本気を出すと、こつもあつさり終わんだな……」

ディフォンは呟き、後ろを向いた。

そこにはあの男達の死体が転がっていた。喉や心臓を刺され、そこから、血の水溜りが出来るほど血が流れていた。

ディフォンは、その光景をしばらく眺めていた。

「昔は、こんなん見て喜んでたんだよなあ……。今は、なんとも思わねえが……」

昔を懐かしむように呟いた後、ディフォンは船を降り、港町に向かって歩いていった。

港町をしばらく歩いたディフオンは……。少しだけ、妙なことに気付いた。今まで、誰とも遭遇していないのだ。

町の人達は、恐らくマグチエスが怖いから迂闊に出歩けないのだろうと推測出来るが、船員に1人も会わない理由にはならない。

「なんでだ……？ こんだけ歩いてんなら、1人ぐらいばったり会うはずだが……」

その疑問に、歩きながら考えていた。そして、一軒の家の前を通り過ぎようとして……。どこからか、こっちを呼んでいる気配がした。

「何だ……？」

ディフオンは首をかしげ、声がした方向を向いた。

そこには家があったのだが、その中に男が1人いて、窓の近くで、手招きしながらしきりにこっちを呼んでいるのが見えた。

「ありゃあ、こっちに来いっつってんだな……。行ってみつか……」

ディフオンは、男がいるその家に向かって歩いた。玄関まで来ると呼んでいたあの男が、中からドアを開けた。そして辺りを素早く見渡すと……。急にディフオンの腕を引き、無理やり中に押し込んできた。

さすがのディフオンも驚き、そして、そのあまりにも強引なやり方

に、少しイラついた。

「おい、あんた……」

文句を言おうとしたが、しかし、男が口を開くのが先だった。

「あ……あんた、どこから来たんだ？海から来たのか？襲われなかったのか？なんでここにいるんだ？この町のこと、どこまで知っているんだ？それから……」

いつまでも続けようとした男を、ディフォンは慌てて遮った。

「ま……待てつて！そんなに一気に質問されても答えられねえぜ？」

そう指摘され、男は落ち着こうと、深呼吸をした。そしてしばらく続けて、落ち着いた男は、ディフォンに向き直った。

「す……すまない。まさかこの町で、この町以外の人間にまた会えるとは思わなかったんで……。思わず……」

塞ぎこんだ男に、ディフォンは励ます。

「まあ、仕方ねえだろ。理不尽な支配に、神経が少し参ってんだ。あんたは何も悪くねえよ」

一呼吸置き、ディフォンは、また口を開いた。

「さっきの質問に答えてやる。俺は海から船で来た。で、確かに襲われた」

息をのんだ男を横目で見て、ディフォンは続けた。

「だが、俺はそいつらを退けた。まあ、どうやったかはあえて言わねえが……。ここに来た理由は、マグチェス・ガインがどの位船員を持っていやがんのか、確かめるためだ。そしてこの町は、そいつに支配されている……。分かってんのは、これ位だ」

全て聞き終えた男は、すかさず聞いてきた。

「船員がどれ位いるのか確かめて……。それから、どうするつもりなんだ？」

「マグチェス・ガインと戦うからなあ。船員は減らしておいた方が、後々楽だ」

男は心底驚き、ディフォンに掴みかかる勢いで訪ねてきた。

「マ……マグチェス・ガインを倒す！？そんなこと、本当に出来ると思っっているのか!？」

「あいつは海賊だ。全ての海賊は俺の敵なんだ。だから、あいつを倒す」

ディフォンの、その並々ならぬ自信を感じ取り、男は戸惑いながらも、また訪ねた。

「本当に……。あいつを、倒してくれるのか……?」

「ああ、倒す。絶対になあ!」

男はしばらく迷っていたようだが……。やがて、大きな決断をしたように、うなずいた。

「船員がどこにいるか、知っている……」

「本当か！どこにいった？」

「あいつらは、この道の先にある酒場に溜まっている」

男は窓から道を指さし、酒場がある方向に、指を動かした。

「分かったぜ。教えてくれてありがとな！」

ディフオンはそのまま、家を出ようとした。

「まっ……待ってくれ……！」

そして出ようとした彼を、男が呼びとめた。

「なんだ……？まだ、何かあんのか？」

「いや、その……」

男は、何故呼びとめたのか自分でも分からずに、少し戸惑ったが……。やがて、口を開いた。

「頼む……。俺達を……。俺達の町を……。あいつの支配から……解放してくれ……！」

男は、頭を下げた。ディフオンはそれを見て、静かに笑った。

「ああ……。まかせろ。必ず俺が、あいつを倒してやるぜ！」

決意を込めたディフォンは、意気揚々と家を出て、酒場へと向かっていった。

男に教えられた道をしばらく歩いてきたデيفونは、その先に酒場があるのを見つけた。屋根と壁の色は濃い茶色で、ドアだけが白塗りという配色の酒場だった。

「あそこか……」

デيفونは一言呟き、ドアに歩み寄り、そして開けようとして……。そこで動きを止めた。

中からは、複数の、おそらく船員達だろうと思われる笑い声が聞こえた。それだけなら予想の範囲内だったので、不思議に思うことは無かった。

しかしその笑い声に混じって、子供の泣き声と、女性の詫びるような声が聞こえたのだ。

「なんだ……？」

気のせいかと、彼はそう思った。しかし、しばらく耳を澄ませて聞いていても、その声は消えることが無かった。

彼は、そのことに疑問を持ちながらもドアを開けて中に入り……。そして目の前の光景に、思わず立ち止まった。

中には、10人の、船員と思われる男達がいた。そしてそれらに混じって、20人位の子供と、その数と同じ位いる女性がいる。

そしてその中の2人の船員が、1人の子供を、まるでおもちゃのようにしてもてあそんでいた。

1人が子供を蹴り飛ばし、それを女性の1人が庇う。その様子を見て、残りの船員達が、まるで楽しいショーでも見ているかのように、大笑いしているのだ。

隅には、その様子を見て震えている子供達と、その子達をなだめている女性がいた。誰もが例外無く、どこかに傷をつけていた。

外から聞こえた声は、これらが原因だったのだ。

ディフォンはそれらを見た途端、顔を下に向けた。そして、近くに座っていた1人の男に、近づいて行った。

その男は、目の前のショーに大笑いしていて、近づいてくる者の気配に気付かなかった。

ディフォンはその男の頭を掴み……。床に、思い切り叩きつけた。

そのあまりの力に、床は、男の頭を中心にして亀裂が走った。顔面が完全に埋もれ、しばらくすると血が滲み出てきて、周りの床に流れてきた。

残りの船員達は、その際に生じた音に気付き、そしてやっと、見知らぬ男が酒場に入ってきていることに気付いた。

船員達は、その見知らぬ男に向かって怒声を浴びせようとし……。

そこで、固まった。

男の頭から手を離し、顔を上げたデیفォンの表情は、まるで、この世の憎悪を一身に込めたような、見たものを体の芯から震えあがらせるような迫力があり、目は、視線だけで人を殺せるような鋭さが込められていた。

その表情を見た子供達は、あまりの迫力に泣き出し、女性達は、その子達を、デیفォンの方を見ないようにしながらなだめていた。

当の本人は、船員達を睨みつけながら、誰に言うでも無く呟いた。

「…………子供達を連れてここから出る…………。今すぐにだ…………」

一瞬何のことだか分からないといった表情をしていたが、すぐに自分達のことを言っているのだと理解し、女性達は、子供達を連れて、急ぎ足で酒場を出た。

その間、船員達は何も出来なかった。

もし不審な動きをすれば、即座に殺されてしまう…………。そのような考えが、彼らの頭を支配していた。

やがて、子供達と女性達が全員出ていき、酒場には、船員達とデیفォンが残った。

デیفォンはその間、昔のことを思い出していた。

あの工場で、監視員に無残にも殺された少女……。そして、近くにいたのに何も出来ず、ただ震えていた自分……。それらの、一番思い出したくない過去が、この酒場でさつきまで起こっていた光景と重なり、思い出されてしまっていた。

「……………てめえらは、俺の一番思い出したくない過去を思い出させた……………。その罪は重い……………」

ディフォンは、スカルチスを腰から抜き、切っ先を、船員達に向けた。

「……………てめえら全員皆殺しだ……………」

そう呟いた後、スカルチスから紫色の霧が出てきて、ディフォンを覆った。そして数秒後に霧が消え、それとともに、ディフォンの姿も消えていた。

船員達は、突然消えたディフォンに驚いていたが、唯一ある出口の前に、あの恐ろしい男がいなくなった事実気付き、大急ぎで、酒場から出ようとした。

しかし、そのすぐ後に、突然後ろから呻き声が聞こえ、その声に思わず立ち止まった彼らは、後ろを振り返った。

その視線の先には、さつき消えたディフォンが、スカルチスと普通の短剣を、右手と左手にそれぞれ握っているのが見えた。そしてその足元には、2人の仲間が、背中を刺されてうずくまっていた。

彼はスカルチスの切っ先を船員達に向けて、宣言するように言った。

「……………てめえらを逃がす気は無い……………」

その言葉を皮切りに、デイフォンは船員達に向けて走り出した。

船員達は悲鳴を上げ、出口に向かって走った。

だがデイフォンの方が明らかに速く、次々と船員達の首を、スカルチスと短剣で貫いていった。

数秒後――。

酒場には、デイフォン以外に立っている者はいなかった。

最初に背中を刺された2人も、後から首を貫かれ、周りの仲間達と同じように、首から、血の池が出来るほど血を流している。

デイフォンは、そんな血だらけの死体ばかりが転がっている酒場の天井を、昔を思い出すかのような遠い目で見ていた。

「……………『無駄に殺すな』、だっけな……………。あんたが言ったこと、まだ実行できて無えよ……………」

デイフォンはそう呟き、過去のことを思い出した……………。

ディフォンの過去 - ? 1

月明かり以外は光源が無い薄暗い道を、ジーフと、その後ろを歩いている俺の、計2人が歩いていった。何分かその道を歩いていると、ふいにジーフが立ち止まり、1つの建物を指さした。

「ここだ」

俺は、ジーフが指さした建物を見た。

全体が白塗りで、月の光に照らされ薄く光っている、三階建ての建物……。もとい、宿場がそこにあった。

「よし！入ろうぜ！」

しばらくその建物を見上げていた俺に、戸を開け、半身だけ中に入っていたジーフが呼びかけた。

俺は戸に歩いていき、中に入った。ジーフは、俺が入ったことを確認すると、1つ頷き、戸を閉めた。

見渡してみると、どうやら一階は酒場になっているらしく、木でできた丸テーブルに4つ椅子が入れられていて、それらが何セットかあった。

ジーフは、それら何セットかの、ちょうど近くにあったセットの1つの椅子に座り、俺に呼びかけた。

「まあ、座れよー！」

その呼びかけを受けて、俺は、ちょうど対角の位置にある椅子に座った。

丸テーブルを見ると、いつの間に用意してあったのか、2人分のグラスと、いくつかの酒瓶が置いてある。

「まあ、まずは一杯飲もうぜ！」

ジーフは酒瓶を開け、酒を俺のグラスにそそいだ。それを見て、俺は顔をしかめた。

「酒なんか飲めないんだが……」

「そう言わずに、まずは一杯だけ飲んでみるよ！」

不満そうに言う俺に、ジーフは明るくそう返した。

俺は、しびしび酒が入っているグラスを口に運び、少しだけ飲んでみた。

酒特有の、あの口がピリピリする感覚がきて、その瞬間、一気に身体が熱くなった。俺はたまらずグラスを置いた。

「し……舌が……！身体も……熱い……！」

そう叫んだ俺を、ジーフは笑いながら見ていた。

「おいおい、ホントに酒が飲めねえのか！そいつぁ、悪かったな！」

笑いながら言ったジーフは、自分のグラスに注いだ酒を口に運び、一気に飲み干した。

「ふ〜！やっぱ酒は美味えな〜！」

満足そうな顔で言った後、ジーフは更にグラスに酒を注ぎ、飲み続けた。

しばらく見ていた俺は、何故か酒をもう一度飲みたい衝動に駆られた。そしてその衝動のまま、つい言ってしまっていた。

「なあ……。俺にも酒をくれよ……」

「おいおい、さっき飲んで呻いてたじゃねえか！大丈夫なのか？」

「あ、ああ……。たぶん大丈夫だ」

「そうか！なら飲め！」

ジーフは、まるで試すような目で俺を見て、俺のグラスに酒を注いだ。

俺は、そんな目をしているジーフを睨みつけながら、グラスを口に運び、一気に飲み干した。

「ほ〜」

そんな俺を見て、ジーフが感嘆の声を上げた。

飲み干して、グラスを置いた俺は、すぐに後悔することになった。

「あがぁ！！口が痛い！！身体が焼けるように熱い！！うぁがぁぁ
！！！」

たまらず俺は、椅子から転げ落ち、床に悶絶した。

「あっははははは！！だから言っただろ！！あっははははは！！！」

そんな俺を見て、ジーフは、腹を抱えながら大笑いした。

それから俺が落ち着くまでの数分間、ジーフは、腹が捻じれてもお
かしくない程、笑い転げた。

「はあ、はあ、はあ、……」

やっと身体の調子が戻り、俺は息を切らしながら、椅子に座りなおした。

「はあ、はあ、はあ……」

ジーフは、腹を抑えながら机に突っ伏し、息を切らしている。

「はあ、はあ、……。いやあ、お前さん、中々おもしれえ奴だな」

ジーフは顔を上げ、笑顔で言った。俺は、それを見てむっときた。

「……あんたといると、調子が狂う……」

確かにそうなのだ。俺は今の今まで、他人にあれほど隙を見せたことは無かった。もしあんなに隙を見せれば、自分の命が危なくなるかも知れないからだ。

だがこの男の前だと、何故か自然に隙を見せてしまう。この男なら安全だ。無意識の内に、そう思わせてしまう何か、この男にはあった。

その男 ジーフは、苦笑いをしながら、頭を掻いた。

「俺と会う奴は、大抵同じこというんだよね……。俺には分からねえが……」

「あなたにはそういう魅力があるんだろう……。あなた自身には分らない、何かが……」

「そういうもんかねえ」

顎に手を当て、そっぽを向きながら、ジーフは何事か考え始めた。俺は、その様子をぼんやりと見ている。

しばしの沈黙の後、ジーフはふいに、「あ、そついや……」と呟き、俺に向き直った。

「お前さん、あの工場であったこと、全部お前さんがやったつってたよな？」

「そつだが……まさか、疑っているのか……？」

「いや、そんな訳じゃねえが……」

ジーフはそこで口をつぐみ、何事か考え始めた。俺は、怪訝な顔を見ながら見ている。やがて考えが浮かんだのか、再度俺に向き直った。

「お前さん、なんであんなことしたんだ？」

「あんなこと……？工場の奴らを、殺したことが……？」

「そつだ。何か理由があつて、やったんじゃないのか？」

俺は、思わずジーフから目をそらした。

理由ならある……。だが、それを言おうかどうか迷ったからだ。

「……俺は……」

「無理に言わなくていいぜ？理由がねえなら、それでもいい。だがな……」

ジーフは立ち上がり、俺の所まで来て、顔を覗きこんだ。

「理由があんなら、話してくれねえか？」

「……何故だ……」

「お前さんがあの工場にいるのを見たとき、正直言つて俺は怖くなつた。だってよ、血だらけの死体のそばで、見たこともねえ狂気染みた笑顔浮かべてたんだぜ？そりゃ、誰だって怖くなるってもんだ」

「……そうだな。……俺も、最初見たときは、自分でも怖かった……」

「だがなあ、お前さんを見ていたら、何故か分からねえが、悲しんでいるようにも見えたんだ」

「悲しんで……？」

「ああ。まるで、誰かを思い出しているようだった」

俺は、ジーフのその言葉に困惑した。

俺は、無意識の内に、あの子のことを思い浮かべていたのか……。そう思わせる何か、やはりジーフにはある……。そう確信した瞬間だった。

俺は顔を上げ、ジーフをしっかりと見た。

「少し長くなるが、いいか……」

ジーフは、笑顔で頷いた。

俺は1つ頷き、あの始まりの日から、今日にいたるまでのことを包み隠さず話した。

「なるほどなあ」

全てを話し終えた後、ジーフはそう呟いた。

俺は、ジーフの反応を見ようと、じっとジーフを見た。

しばしの沈黙……。

ふいにジーフが後ろを向いた。俺からは、その表情が見えない。

「俺にはなあ、許せねえことが1つだけあんだ」

ふいにそう言った。俺は聞き返した。

「許せないこと……？」

「ああ。俺はなあ……」

ジーフが、俺の方に向き直った。俺は、その表情を見て、思わず身をすくめてしまった。

その表情は……。さっきまでのジーフとは一変して、怒りを露わにしていたからだ。

「俺は、子供を殺す奴が一番嫌いだ」

「こ……子供？」

「そつだ。お前さんの話によれば、お前さんは、その場にいた子供まで殺したつづつことになるが、間違いねえか？」

詰問口調で言われ、俺は言い淀んだ。

「…………俺は…………」

「まあ、いいさ。俺には、お前さんのそんなときの気持ちは分かんねえからな。だが、あの工場で殺されていた中に、子供も混じっていたが、それもお前さんが殺したのか？」

「…………」

俺は何も言えなくなった。いや、正確には言えなかったというべきか。

確かに、俺は子供も殺した。だが、それを言えば、ジーフと戦わなければいけない。そう思わせる迫力があり、何も言えなかった。

いつまでも黙っている俺に、ジーフは溜息を吐く。

「そつか…………殺したんだな」

「…………」

「まあ、いいさ。お前さんには、色々あったんだ。そうなるのは、仕方のねえことだ。…………だがなあ、これだけは覚えておけ。俺の仲間になるからには、子供を殺すことは許さねえ。次やったら、そん

「ときはお前さんを殺す」

「……ああ」

「あともう一つ……。無駄に殺すな」

「……どういことだ」

「つまり、逃げ腰になってる奴を殺すなっつことだ。逃げてえ奴は逃がせ。追いかけてまで殺すな」

「もし、それを破ったら、どうなるんだ……？」

「説教してやる。朝から晩までな」

ジーフは、そういうと立ち上がり、どこか虚空を見上げた。

「お前さんは、過去のことを話した。……俺も、過去のことを話してやる」

「あんたの……過去……？」

「そつだ。……俺は昔、帝国で結構高い地位にいたんだ」

「帝国……だと……」

帝国というのは、この世界の政治と経済の中心になっている場所だ。

周りを高い堀で囲まれ、外からは何も見えないようになっている。

そして、常に黒い噂が絶えない。

「…… 奴隷制度があり…… 低い地位にいるものは、物のように扱われると聞いたことがある……」

俺がそう呟くと、ジーフは顔を曇らせた。

「その噂は、本当だ。俺は、奴隷制度を無くそうとした。がむしやらに頑張つて、いつしか、政治に意見を言える地位にまで登りつめた。…… 俺は、奴隷制度を廃止しよう言った。…… だが帝国は、俺の意見を一蹴した。…… 俺はその瞬間、自分の地位が、何の意味もなさないことに気付いた。俺は、そのとき最高の権力を誇っていた王を殺し、帝国から逃亡した」

全てを話し終えたジーフは、疲れたように深く息を吐き、椅子に座った。

俺は茫然とした。今日の前にいるこの男は、帝国の人間だったのだ。

「まさかあんたが……」

それしか口に出せなかった。それほど、俺は驚いている。

「ああ、そうさ。…… 俺は、帝国から追われている身だ」

「…… だが、そんな噂は聞いたことないぞ……。確か、王を殺したのは、誰だか分からないということになっていたはず……」

「そりゃそうだ。高い地位にいた人間が、王を殺したなんて知れば、信用ががた落ちだからな。…… だが、帝国の奴らは、俺のこ

とを追っている」

「何故、そう言い切れるんだ……？」

「時々、1日に何度も海賊に襲われるからだ」

俺は、それが関係しているのか分からず、首をかしげた。そんな俺を見て、ジーフは言った。

「海賊つつうのは、元々帝国が考え出したもんだ」

「そうだったのか……？」

「ああ。今は帝国とは無関係な海賊の方が多いがなあ。だが、今も何割かは、帝国の海賊なんだ」

俺はその瞬間、全てが繋がった気がした。

「そうか……つまり、何度も海賊に襲われたということは、同時に帝国に追われている……そういうことか？」

「まあ、そうなるな。帝国は、俺が死ぬまで追ってくる。……それでもお前さんは、俺の仲間になつてくれるか？」

真剣そのものといった表情で俺を見て、ジーフは言った。俺はしばらく迷ったが、1つ頷き、ジーフを見返した。

「俺は、あんたの仲間になりたい……あんたと話していて、心からそう思った。……俺の方こそ、頼む」

ジーフは、そんな俺を見て、一転して笑顔になった。

「嬉しいことになってくれるじゃねえか！改めてよろしくだ！ディフオンー！」

ジーフは、手を差し出した。俺は、おずおずと、その手を握る。

「ああ……ジーフ」

ジーフは笑顔で、手を握ったまま腕を振った。俺は肩が痛くなったが、何故か悪いことのように思えなかった。

しばらくして手を離し、ジーフは、欠伸をかいた。

「さて、そろそろ寝るとすつか……。お前さん、今夜はどうする？」

「俺は、ここで寝る……」

「そうか！じゃあまた明日な！」

「ああ……」

ジーフは手を振りながら、宿になっているのであろう2階に続く階段を上がっていった。

俺は、ジーフが完全に上がりきったのを確認した後、壁に背をつけて座った。

「仲間か……。悪くないな……」

俺は、いつの間にか笑みを浮かべていた。

船内の様子 - 1

港に停留している、二つの船。

一つは、ディフォンがこの港町に、嵐にまみれながらも来た時に乗っていた船。そしてもう一つは……この港町を支配している、「ルーラーエンペラー」マグチェス・ガインが乗っている船だ。

その二つの船の一つ、マグチェス・ガインが乗っている船の船内。食堂として使っている、この船で一番広い部屋……。

その部屋で、十人の船員が、怯えた様子で、椅子に座っている男を見ていた。

一目見て、誰もがガタイが良いと答える体型をしていて、短髪は完全に白髪になっており、目は、まるで鬼のように鋭い光を放っている。

白いズボンと白い服を身につけ、肩には白いジャケットがかかっているその男……マグチェス・ガインは、普段も厳ついその顔に、更に怒りを含み、どこか一点を睨みつけていた。

彼が何故苛立ちを露わにしているのか……。それは、もうとっくに交代の時間を過ぎているのにもかかわらず、いつまで経っても戻ってこない船員達が原因だ。

彼は、自分に従わない者は何人たりとも許さず、徹底した支配を与える性格の持ち主だ。

しばらくして、様子を見に行かせた、1人の男が戻ってきた。

青を主体とし、千切れ雲のような白い模様があるズボンと、夜のよ
うな黒をした服を身につけ、その服の上に、黒っぽい青の色をした
ロングコートを着ている。

髪は、左目が覆われるほど長く、隠れていない右目は、不機嫌そう
だ。

腰には十本の刀が差してあり、それが印象を深めている。

その男……アリユーラ・ノースは、マグチェス・ガインの元まで歩
いていき、その前で止まった。

「残りの船員は、全員殺されていた。誰がやったかは分からない」

どうでもいいとでも言うような口調でとんでもないことを報告され、
その場にいた船員達は、ざわざわとし始めた。

その報告を聞いたマグチェス・ガインは、拳を握り締めながら立ち
上がり……。

目の前にいたアリユーラを、力任せに殴った。

突然のことに反応できず、アリユーラは、そばにあった机と椅子を
巻き込みながら倒れこんだ。

そんなアリユーラを、マグチェス・ガインは怒りのこもった目で睨
みつけ、その怒りに相応する声で怒鳴り散らした。

「俺の前ではそんな口調で話すなど何回も言っただろうが！！全員殺された！？誰がやったか分からない！？ふざけるのも大概にしろ！！」

理不尽な怒りをぶつけられ、胸倉を掴まれたアリユーラは、目の前にいる男……マグチエス・ガインを睨みつけた。

「何だその目は！！舐めるのも大概にしろ！！」

そう怒鳴り、ふいに嫌な笑みを浮かべた。

「分かっているだろ？お前は、俺には逆らえないんだ。本来ならお前ごと、あいつを殺すところだが……チャンスをやろう」

胸倉から手を離れたマグチエス・ガインから離れるように後ずさり、アリユーラは、下を向きながら浅く息を吐いた。

そんなアリユーラの様子を嫌な笑みを浮かべながら見ていたマグチエス・ガインは、そのチャンスとやらを話した。

「船員共を殺した誰かを、お前が殺してこい。そうすれば、この町からも出ていく。……どうだ？悪くない条件だろう？」

「殺したら本当に、この町から出て行くんだろうな？」

「ああ、出ていく。その代わり、殺せなかった場合は……」

「殺せない場合など無い」

言い切り、アリュローラはマグチエス・ガインに背を向け、歩き出した。

マグチエス・ガインは、その態度に苛立ちをおぼえたが、すぐに嫌な笑みを浮かべ、呟いた。

「優秀な駒は、こつやって使つに限る。……クッククク……！」

肩を震わせ、やがて馬鹿でかい声で大笑いし始めた自分の船長を、船員達は、恐ろしいものでも見るかのように見ている……。

アリユーラが船を出ていった後、マグチェス・ガインは、ある部屋に向かつて歩いていた。

しばらく歩いてその部屋の前に着くと、彼はノックも無しに、その部屋のドアを開けた。

部屋の中には、少女がいた。

薄汚れ、かるうじて白だったんだろつと分かるワンピースを身につけている。しかしそんな格好をしているのにもかかわらず、誰が見ても、可憐だと言わざるをえない容姿をしていた。

その少女……レモアは、部屋に入ってきたマグチェス・ガインを一瞥し、すぐに目を逸らした。

その様子に苛立ちを覚えたマグチェス・ガインだったが、すぐに嫌らしい表情を浮かべ、レモアに近づき、そのそばに座った。

「やあ、レモア。気分はどうだ？」

「……………」

マグチェス・ガインの言葉が聞こえないとでも言うように、レモアは、そつぽを向いたまま黙っている。その態度にまた苛立ちを覚え、「一発殴つてやるつか」と思ったが、その考えを押し込め、また嫌らしい表情に戻り、話しを続けた。

「お前の兄貴は優秀だぞ？なにせ、俺の言ったことは全て実行するからな。これもお前がいてくれたおかげだ」

「……………」

「クッソ……………！まあいい。お前が反応しないのは、今日に始まったことじゃない。お前は特別なんだぜ？他の奴らなら、すでに殴り倒しているところだ」

「……………」

「おっと……………！こんな話しをするために来たんじゃないんだっただ。お前に1ついい報告をしてやるっ」

「……………」

「お前の兄貴は、俺の船員共を殺した誰かを探している。もしお前の兄貴がそいつを見つけて殺せば……………この町から、出て行ってやる」

「……………！」

レモアは初めて反応し、マグチエス・ガインに向き直った。

「……………本当……………？」

「ああ、本当だ。俺をここまで苛立たせた奴だからなあ！そいつの死体さえ見れば、俺の気も晴れる！がっはははははは！！」

マグチエス・ガインは、不愉快な大笑いをし始めた。レモアは、それを聞いて気分が悪くなった。

ひとしきり大笑いした後、マグチェス・ガインは、部屋から出ていった。

足音が遠くなっていくのを確認し、レモアは、窓に向かって歩き、そこから空を眺めた。

辺りは夕焼け色に染まり、あと少しで太陽が完全に沈み、夜になることを物語っていた。

レモアはその景色を見ながら、呟く。

「お兄ちゃん……。もうすぐ会えるね……」

その顔には、嬉しいような、それでいて、悲しいような表情を浮かべている。

「でも……。そんなことせずに……。お兄ちゃんが、助けにきてくれたらよかったのにな……」

レモアは、船員達を殺した誰かを殺さずに、兄……。アリューラが、直接助けに来てくれることを望んでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7759u/>

パイレーツ・キラ

2011年12月11日16時54分発行